



熊本大学応援団会誌

剛

毅

和田英樹名誉会長追悼号

平成25年11月2日発行

熊本大学応援団OB会

巻 頭 言

熊本大学応援 OB 会 会長

河村 久幸

和田英樹名誉会長追悼剛毅発刊に向けて、現 OB 会長として御挨拶申し上げます。

和田英樹名誉会長は今年7月28日午前7時頃急性心筋梗塞でご逝去されました。あまりにも突然の訃報で只々嘔然とするばかりで、今もって信じられない気持ちです。

和田先輩は熊本大学応援団を創部された人物です。その経緯は、昭和41年2月田川体育会委員長（2代目団長）から当時空手部主将の和田先輩に「熊大に応援団を創部してほしい」との依頼を受け快諾されました。それが応援団の始まりでした。

当時団員一人の団長として活動を開始。その年5月対熊商大との定期戦開会式のエール交歓にただひとりエールを切られました。これが応援団史上に残る有名な話として今も語りつがれています。

その後、空手部の有志を集め活動を深め、昭和42年11月24日熊大応援団結成記念演武会を水前寺体育館で開催し、名実共に熊大応援団が熊大体育会の学生に認知されたのでした。その間の1年10か月は凄まじい努力の日々であったと思います。熊大応援団会誌に当時の回想があります。「太鼓が欲しかった日々、団旗が、校旗が、部室が、演武が、練習場が、そして何より団員が欲しかった日々、それらの日々が教えてくれたものは、求めなくてはいけないということだった。」と回想されています。無から有への厳しい鍛錬を重ね、この限りなき欲望が将来の限りなき前進につながったことだと思えます。この応援団という集いが常に人間と人間との、友と友との心のふれあいによって支えられていることを先輩から教えて頂きました。

私は和田先輩から OB 会会長を引き継ぎましたが、和田 OB 会長の変わりはもちろんできませんので、私は副会長、事務局長、会計他役員とのコミュニケーションをよくとり、チームワークで本当に微力ながら、OB 会を皆さんと共にこの熊大応援団 OB 会を運営していきたいと思えます。皆さんのご協力をお願いいたします。

今は和田先輩の御冥福をお祈り申し上げるばかりでございます。

絆

池田 一徳

和田さん。少し早かとじゃなかとですか。次の応援団 OB 会に出席して、話ば聴きたかったと思うていたのに、寂しさで一杯です。

和田さんとは不思議な縁で結ばれていましたね。今から四十五年位前、私が北九州高専に務めていた時、熊大応援団一代森下さんも北九州高専に務めておられた関係で、森下さんが和田さんを我が家に連れて来られ、酒を飲みながらお話を聴きました。

その時、お二人の強い絆で結ばれた友情や厳しくも愛情あふれる生徒指導の姿勢に感動し、嬉しさのあまり、我が愛刀を抜いて、居合の形をご披露したと思います。その時まさか私が熊本大学に赴任し、しかも応援団の顧問になり、OB 会で和田さんにお会いできようとは夢にも思っていませんでした。

人生嗚呼無常。七月二十九日、和田さんの訃報を秋田さんから聞き、啞然として翌朝、まだ夜が明けきれぬ前に大牟田の我が家を出発し、知らない道を地図を頼りに行橋に向かいました。

葬儀場には早く着いたので、弔問客は誰も来ておられませんでした。奥様と、ご子息に弔意を述べ、和田さんと最後のお別れをしました。

広い葬儀場一杯に花輪が飾られており、しかも、熊大応援団の歴代の花輪がずらりと並んでおり、熊大応援団の絆の強さと和田さんの偉大さに感動しました。また葬儀には参列者が、あふれるばかりに広い会場を埋め盡くされていました。

短い人生を生徒指導、学校運営、教育会の要職等に情熱を燃やされ、盡され、さぞお疲れだったことでしょう。どうか安らかに、ゆっくりお休みください。心からご冥福をお祈りいたします。

合掌

幼少の頃、万日山の我家には、熊大生のお兄さん・お姉さんが、しょっちゅう遊びに見えていました。

玄関に“金守先生、オジャマシマース！”と元気な声が響くと、父は“オーッ、来たか”と嬉しそうに出迎え、母はいそいそと台所に走っておりました。

特に応援団の皆さんが見えた時は、飲めや唄えやの宴となり、最後に大きな声で武夫原の大合唱になるのが常でした。

父が他界してかれこれ、20数年の月日がすぎます。

その間、団の幹部の方からは毎年、毎年、律儀に御連絡をいただいております。

娘であるということだけで、何のお役に立っているわけでもない立場として、正直なところどう対応して良いのかもわからぬままに不義理を続けておりました。

ある日、孫から“ばーばのお父さんってどんな人だったの？”と質問を受け、古いアルバムを引っ張り出して“ホラ、この人よ。大きい人でしょう”と説明しながら懐かしい写真を見ているうちにこの子達に父の愛した熊大を、そして、どのような事を大切にして生きた人であるかを伝えておきたいと強く思いました。

丁度、応援団の定例 OB 会の案内が届いており、何も考えずに出席の連絡をとりました。それも娘と孫の三人連れです。

とにかく、当日はとても緊張しておりました。

20年以上も不義理をしていながら、突然出席を希望したのですから。

それも、三人で……

その時、会場で迎え入れて下さった和田名誉会長の包み込むような暖かな笑顔は今でもはっきりと覚えております。

“イヤー、どーも、どーも”と満面の笑みとともに差し出されていた両の手のぬくもりは、コチコチになっていた私の緊張を一瞬にしてとかしてくれました。

おかげで、本当に懐かしく楽しいひとときをすごす事が出来たのです。

懇親会の間、それとはなく何度も和田名誉会長のご様子を拝見しましたが、何度拝見しても美味しそうにグラスを傾けながら若い団員の皆さん方をニコニコと愛おしそうに見守っていらっしやいました。

ああ、父も、この方も応援団が大好きで大好きでこよなく愛しておられるのだとしみじみ感じさせられた一夜でした。

数回しかお会いする事はできませんでした。

数回でもお会いできて本当に良かったのだと自分に言々聞かせております。

ありがとうございます。

ご冥福をお祈り申し上げます。

2013.10

山田 由紀子

会者定離という仏語がある。出会ったものは必ず別れるという意味で平家物語にも出てくる。人の世まことに無常である。和田の葬儀が終わり、急にこの世の中がつまらなく面白くないと思つて沈んでいたら、横に座つていた彦君（三代目）が、「先輩マクロに考へたら、生きていくことが一瞬で、生が奇跡のようなものだ」と言つた。この言葉が深く腹に響いた。人類の遺産と思われ、聖書や論語がそれである。これらの書物は、キリストの使徒や孔子の弟子と呼ばれる人達たちが言行録を記したものである。人の命は一瞬でも、その人の言行は残る。和田英樹の言行を少しでも残しておこうと思ふ。それは熊本大学応援団の遺産となるに違いない。優しさと厳しさが同義語と教えてくれた和田（以下ウルターンと記す）高倉健の

「あねさん・・・」と言う場面にきたら、必ず泣くウルタン、会った時の本当に嬉しそうに顔、こちらが恥ずかしくなつて、つい照れで横を向いていたら、突然コノヤロトと首を絞めて来たことがあつた。最初はウルタンの意味が分からず驚いた。これが彼の愛情表現で直情径行が辞書から出て来たようなものだ。ウルタン辞書は優しさと厳しさが同列に書いてあり、愛情と乱暴が混在していた。論語の仁について調べてみたら、「仁」そのものは六項目、「仁を問う」が四項目、その他、仁に関して四十三項目あつた。ウルタンの応援団とはという単純な語についてもおそらく数え切れないほどあると思われる。それは、言葉の混乱ではなく、言葉に対しての広がり、深さを意味していると思う。それは取りも直さずウルタンの人となりを表している。誠実さと愚かさ色気と幼さ、絵画で言えば極彩色の楽しい絵であつた。もう見られないと思うと、淋しい。

この度古賀君より和田先輩の突然の訃報を聞き言葉を失いました。走馬灯のように先輩との思い出が甦ってきました。和田先輩との出会いと応援団創設期の思い出をお話します。

私が熊大に入学し空手道部に入部しました。和田先輩が3年生でキャプテンをしておられました。そして1年が経過し2年生になる時、体育会の城委員長から体育会の役員をやってほしいと誘われ、同期の原誠も柔道部で頑張っており「1人より2人なら出来る」とその誘いに乗りました。役員交替のリーダーシップトレーニングが「阿蘇青年の家」であり、その時の指導教授が金守先生でした。キャンドルサービスがあり、丁度その時九大の体育会も同様のトレーニングがあり、九大応援団が出てきて巻頭言から校歌が披露されました。その格好の良いこと。それに比べて熊大は全員で「武夫源頭に草萌えて」の円陣を組んで踊り、悔しかった思い出があります。「よへし応援団を作ろう」と心密かに決心し、その思いを原誠君に相談し合意したことを思い出します。

当時応援団の団長として自ら名乗ってきた工学部の応援団長がいましたが、応援団長は空手道部の和田先輩にお願いしようと思っていました。折も折、和田先輩は空手道の練習中足を骨折しており、松葉杖の状態でしたが治りかけの身でした。私共の申し出を快く引き受けて頂き、空手道の1年生諸君を集め、急ごしらの応援団が発足しました。「熊大ここにあり」という精神でと夏のインカレに応援団が行くために、今まで眠っていた応援歌や校歌や引っ張り出し、熊本商科大学へ応援指導を受けにいたり、大漁旗を作ったり、当時の様子は3代目の古賀君が語ってくれます。空手道部があったから、和田先輩が空手道部のキャプテンだったから出来たと思います。そして最初の1年が過ぎ、2年生部員を空手道部に返してほしいと工藤キャプテンからの要請があり、応援団に残る者、空手道部へ帰る者それぞれの希望を聞き3代目の古賀君が一人残ることになりました。そうすると2名の団員だけ、私と原君も体育会を辞め、次ぎの世代に引き継ぎ、それぞれの出身クラブに帰ることになります。そこで私共2名も応援団を引き継ごうと決心し、正式に応援団員を募集することになります。

熊大応援団は「よその大学応援団と違うのだ」純粋に「熊本大学の全学の応援団として」体育会に所属するが精神は「全学のため」、そして「学生らしく毅然とあろう」暴力団まがいの風潮は決してしない。当時熊大も学園紛争の嵐が吹き始めた時期であり右翼に見られる傾向が強かったのですが応援団として毅然と対応してきました。応援団の中から学園紛争に入る者の出てき、「自分の信念がそう思うならそうしたらよい」しかし1つだけや約束したいことがあるそれは、「道であっても挨拶はしよう」ということでした。それは和田先輩の思いでもあります。このような思い出が数限りなくよみがえります。私の熊大の応援団精神は今でも生き続けており、その精神は今も受け継がれ、ここまで続いてきました。和田先輩に感謝申し上げます。ありがとうございました。安らかにお休みください。(合掌)

和田先輩へ

格言1 為せば成る、為さねば成らぬ何事も、……………

格言2 ならぬものはならぬ、……………

和田先輩の生き方ですが、見事に貫きましたね。

ウルトラ単細胞と言われつつ、教育を通し和田英樹がやって来たことが今日の葬儀に見事に現れています。最後に同窓、教え子のエールにて葬儀が終わりましたが、つくづく和田先輩はいい先輩と涙が止まりませんでした。

佐村君の弔辞の中に、学生時代に酒の飲み方を指導されたと有りました。1学年上の私には、先輩は余り飲まずにコップ酒をウンウン解ったサア飲めサア飲めと頂かされスグニ酔ったのを思い出します。

66歳の今でも当時の飲み方が直らず安上がりになって来ているのも、先輩から頂いたものと感謝しています。又飲みたいのですが本当に残念でなりません。そちらには5人の応援団の仲間がいますが、早すぎたと断わってください。そして、ゆっくりしてください。

合掌

第3代目 古賀正博

和田先輩

いままで大変お世話になり、

ありがとうございました。

安らかにお眠り下さい。

いずれ後に続きます。

3代 南 茂司

一、 生徒に親しまれた式典号令

この役割は教頭先生です。全国一の大声で「起立・礼・ただ今より・・・」と発する訳です。威圧感を感じさせない、引き締まった声で最初は生徒も失笑していたようですが、回を重ねる度生徒は号令を楽しみにしていたようだ。私の二男は卒業アルバムに教頭先生のサインをもらい自慢していた。

二、 壇上で歌を披露した校長先生

卒業式前日のOB会(錦陵会)入会式で、錦陵会に参加したら歌うこともあろうと、年配の会員が歌っていた応援歌等3曲を披露。卒業生への餞として素晴らしく思った。

三、 旗への思い

豊津高は校名が「育徳館高校」に改称されたため、その校旗はなかった。学校創立250周年の寄付を錦陵会員に募っていた。式典や記念誌・周辺整備の件が役員会の議題の中心であった。この時和田先輩は錦陵会の副会長としてお世話されていた。ある日幹事長から校旗の件が提案された。内容は和田前校長から「もしみなさんが了解してくれるなら、寄付をしたい」というものであった。費用は約250万円程度。数多くの会員に配慮した申し出であった。最終的には了解を得て、相当額の寄付が決定した。校旗の重要性を認識した先輩ならではの思いで敬服している。

私の知ってる範囲で略歴を記します。

昭和43年4月 福岡県立豊津高等学校
京都高等学校
苅田工業高等学校
豊津高等学校教頭
糸島高等学校校長
戸畑高等学校校長
福岡県教育委員会人事主幹
育徳館高等学校中学校校長

和田先輩を悼む

4代目 児倉静二

「応援団に入るなら合格させちやるけん」、と受験日前夜、こともなげに告げられ、学生会館の狭い縁側で、奇異の目に晒されながら、お手々を振った昭和42年、春の合宿。

春夏秋冬、朝も昼も夜も、武夫原にて四股に立ち、手を振り、走り、雄叫び、ひたすらに練習に明け暮れた毎日。

立田山、武蔵塚、おぜき橋、金峰山、江津の湖、阿蘇の山々、なつかしの日々よ。堂々と人生を説き、青春を燃やし尽くしてくれた和田先輩、ああ、わが人生は応援団、和田先輩と共にあり。

豪放にして情に篤く、機微細やかにして大海のような豊かな心を持ち、年賀状からはみ出して生き様を鼓舞する熱血漢、夢と理想はどこまでも高く、されど市井の人であった和田先輩。高橋秀樹と和田浩治を足して二で割った端正な顔と名前、お人よしで、少しオッチョコチョイで、ヤクザ映画を見て涙する、てらいも無くキザで格好マンの和田先輩、われ等が誇り。

幼い頃から憧れの教師として、幾多の教え子に情熱をささげ、それぞれの赴任地で和田秀樹の精神を刻み、教育者として愛と誠を全うした和田先輩。母校豊津の教壇に始まり、母校で花道を飾り、頂点を極めても奢ることなく、教職者として実り多い人生を綴った和田先輩。

誰からも好かれ、愛され、慕われ、尊敬され、これからも愛され続ける和田先輩。人生の指標であり続け、いまでも目の前に聳えて立つ和田先輩。そして、誰よりも応援団を愛した和田先輩。

北の地でゴルフに興じ、サイクリングの楽しみを説く好々爺となり、あまたの人々に感謝し、来し方の春秋を満面の笑顔で語り続けた和田先輩。残された人生をこれから楽しもうと杯を重ねた日から、わずか1年、言葉もあらず、ただ、ただ、ただ無念。旅路の安らかなることを心からお祈りする。

「生かされているという宿命の中で、精一杯生きる。」 押忍

大切な道しるべ

四代 桃坂 惠次

自分と和田先輩の出会い、熊大の入試の時でした。そして入学と同時に、選択の余地なく、同期の豊津高校OBの殆どが応援団に入ることになりました。当時の和田先輩の「巻頭言」を切る勇姿は忘れることができません。また応援団の打ち上げ等の飲み会でも豪快で、よく「桃坂！一心太助を歌え」と言われたことを思い出します。

和田さんのことで特に印象に残っているのは、自分たちの結婚式の何年かあとに、「おまえの結婚式が縁で俺が結婚できた。」と言われたことです。というのは、我々の結婚式の披露宴に和田さんの親戚の方がいて、いろいろ話が進んで結婚話になったということでした。自分たちは和田さんがつくった応援団が縁で結婚し、それが縁で和田さんが結婚した。何か不思議な縁を感じました。

また、和田さんが豊津高校（現育徳館）に在職中、中学校の進路指導はどうなっているかという問い合わせがあり、情報を交換した記憶もあります。中高の違いはあっても、同じ教職にある者として教わることも多々ありました。

人生、出会った人すべてと最後までいっしょに生きていくことはできません。いつかは別れる時がきます。しかし、和田さんから学んだ多くのことは、我々の心の中に生き続け、これからの人生において大切な道標になるに違いありません。

きつと今日も天国のどこかで、我々を励まし、応援してくれていることでしょう。

和田先輩、本当にありがとうございました。合掌

和田先輩への追悼の辞

和田先輩本当に残念です。

和田先輩のことは、和田先輩と中学・高校が同期の兄（元高校の教師）から熊大に入る前からお聞きしていました。

20年前に兄が心疾患で突然死し、和田先輩がお参りいただいた時にお話はできませんでしたが、目で「非常に残念だろうがお前が兄貴の分まで頑張って生きろ」と言われたような気がしたことを思い出します。

和田先輩とは熊大受験の時にお会いして、豊津高校出身者としては合格したら何が何でも応援団へという道筋がしかれていました。多少抵抗しましたが、最終的には気持ちが引き込まれるように入団していました。

和田先輩が4年生の時の1年間を団員としてともに過ごすことができたことが、自分の大学生活にとって非常に意義深く思います。

「応援団のがむしゃらな練習」、「大学から下宿への帰りの歌の練習」、「和田先輩の下宿での不拔けたような集まり」、「和田先輩の下宿の近くのお好み焼き屋での他愛もない食事」など普通に過ごしていった日々が無性に思い出されます。

最近のことですが、西日本工業大勤務の時代の数年間は毎年研修会参加と称して上京されて、宇佐さん・児倉さん・木村さん・遠山さん他と飲んでいました。高校の校長時代から西日本工業大勤務までのご自分の人脈形成からその拡大、活かし方等のお話を伺ったように思えます。西日本工業大を辞められてからも西日本工業大野球部の春・秋の大学選手権出場時には応援と称して上京され、上記メンバーと飲んで近況を語り合っていました。今思えば、和田先輩からの、「上京するぞ！」の連絡を心待ちにしていたように思えます。

最後にお会いしたのは、本年6月2日の東京錦陵会（豊津高校の関東地区同窓会）でした。第一声が「上城！お前の携帯は何回かけても繋がらんが番号が変わったのか？」でした。いつもと変わらぬ口調で、自分いつものようにお会いできた喜びを感じていました。特別講演として「ならぬことはならぬのです」を講演されましたが、和田先輩の教育者としてはじめて講演を聴くことができ感動しました。講演内容は、私見はほとんどいれずに、全てが何らかの根拠に基づいたもので、非常に詳細ですが、分かりやすくまとめられており、さすがに、福岡県の校長会長までされた方であることを少し垣間見ました。

大学時代に普通の学生では途方もないと思われる熊大応援団を和田先輩一人で立ち上

げられ、そして、その意思を引き継いで 50 年近く経った熊大応援団は、和田先輩の意思そのものと思われます。和田先輩は亡くなりましたが、熊大応援団は和田さんの意思を永遠に引き継いでいくことが残された全ての会員の義務と思います。

私は、「和田先輩と同期の兄貴と和田先輩の、二人の兄貴」を亡くしましたが、残された人生を頑張って生きています。

和田先輩、本当にご苦勞様でした。今後も我々をずっと見守っていただきますようお願いいたします。

4代目 上城 洋一

本年6月 東京錦陵会でのご講演に感銘したこと、懇親会締めのエール交換でののはつらつとしたお姿が思い出されてなりません。残念ですが、熊本大学応援団の礎を築かれた和田先輩安らかにお休みください。合掌 押忍

4代木村 英美

東京錦陵会定期総会アトラクション

演題「ならぬことはならぬものです。」

元福岡県立豊津高等学校長
(錦陵同窓会副会長)
和田 英樹

【レジュメ】

- 1 はじめに → 自己紹介をかねて
- 2 「藩校サミット」との関わり
- 3 「錦陵魂」ということ
- 4 現職勤務最後の朝に
- 5 おわりに → 生きているかぎり

【補足資料(1-A)】

〈ならぬことはならぬものです〉—— その昔、会津藩にあった幼児教育のルール(什の誓い)の結びの言葉。藩の上士の子弟は6歳になると教えられた◆「年長者に背いてはならぬ。年長者にはお辞儀をしなければならぬ。嘘言を言うてはならぬ。卑怯な振る舞いはならぬ。弱い者をいじめてはならぬ。戸外で物を食べてはならぬ。戸外で婦人と言葉を交わしてはならぬ」◆その最後にくならぬことはならぬと結んだ。「戸外で婦人と」はさすがに時代遅れとなったが、その他は現代にも通用するところが少なくない。◆「判断力のまだない少年たちが独断に陥るのを未然に防ぎ、自らを律する心と友人との一体感をはぐくむのに大いに益した」と会津に詳しい作家・中村彰彦さんが書いている。◆著書「搜魂記 藩学の志を訪ねて」によると、氏が講演で訪れた市立日新小学校の柱にくならぬことはならぬものですと張り紙があったという。会津若松市の県立高校3年の男子生徒がとびきりの〈ならぬこと〉を犯した◆彼には〈ならぬことはならぬ〉が伝わっていなかった。

[H19. 5. 17 読賣新聞夕刊]

【補足資料(1-B)】

- 一、年長者の言ふことに背いてはなりませぬ
 - 二、年長者にはお辞儀をしなければなりませぬ
 - 三、嘘言をいふ事はなりませぬ
 - 四、卑怯な振舞をしてはなりませぬ
 - 五、弱い者をいぢめてはなりませぬ
 - 六、戸外で物を食べてはなりませぬ
 - 七、戸外で婦人と言葉を交へてはなりませぬ
- ならぬことはならぬものです

「剛毅」

和田英樹名誉会長追悼号に寄せて

しばしば創設時の熱い思いに触れさせていただきながら、継続することの意味に葛藤を繰り返し繰り返しした下級生の日々。何時しか、先頭にあつて厳しい練習を引っ張ったこと。後輩を見守る立場になり、卒業して社会人一年生。あつという間に定年を迎えて尚工作中的の今日。生涯現役社会の実現に向けた就労の在り方が問われている。

六十五歳になったら、直接お会いして、いろいろな話を伺いながら、あらためて来し方行く末のことなどを語りたいと思っております。自身が出来ることを全力で追求し続けることの大切さ。信頼できる仲間が居ることのありがたさ。人生の後半戦に取り組む際の明確な動機づけと環境をいただきました。

五代 茅畑 篤

和田前会長の追悼に寄せて

5代 野村 敏秋

丁度、去年の9月、和田先輩の所に行き表札の字をお願いに伺い、快く受けて貰いました。今、自転車にこっていると書いていました。自転車でわざわざ届けて貰いました。

悲報は地区の元高校の先生をしていた区長よりでした。間違いではないかと思い、他の元高校の先生をしていた人に聞いてみました。残念ながら間違いではないとの事でした。

私が和田先輩を初めてみた時は大学受験の宿でした。窓わくに腰かけていました。が、大学に入ってもいないので誰だろうと思って忘れていました。暫くするとわかりました。あれからもう47年も過ぎています。

私もようやく故郷に今年3月帰りました。これから時々寄らせて貰おうと思った時に非常に残念でなりません。御冥福を祈ります。私も53才の時に心筋梗塞を患い2回オペをしました。

和田先輩を偲んで

和田先輩が卒業された春に入学したので、現役の団活動においてご一緒の機会はなかった。和田先輩に初めてお会いしたのはその年の演武会に OB として来られた時であったように思う。先代諸先輩達は和田先輩のことをほとんどが「ウルタン」と呼んでいた。最初は変わったおもしろい呼び方があるものだなと思っていた。後で段々とその意味がわかってくるのだが……。

その次にお会いしたのは社会に出て富山で高速道路建設現場に従事している時だった。富山県は当時、全国的に進学率が高く注目を集めていたため、たまたま福岡県教職員視察団の一員として県下の有力校を視察に来られたのであった。久しぶりにお逢いしてその夜はかなり盛り上がり遅くまで痛飲した。

(九州に帰ってきてからの話であるが、飲むといつもその時のハプニング珍事を思い出されて愉快地話されて、それをまた、肴にしながら、飲まれたことがなつかしい。 *ハプニング珍事とは先輩のお話だと福岡県教職員視察団の宴会が終わるのを廊下で待っていた応援団後輩(私)がしびれを切らし、宴会場に入り私も仲間に入れて欲しいと先輩に詰め寄り、一緒に飲みだしたというものであった。その時は富山出身で第17代の金川君も同席していたはずだから機会があったら真偽の程を確かめてみたい。)

3回目は宮崎に帰郷してから初めて OB 回に参加した時だった。その後、OB 回でもゴルフコンペが開催されるようになり、2回ほど同伴させて頂いた。ショットもパットもプロ顔負けの独特な思い切りの良い楽しいゴルフをされた。常に笑いがあり、全てにエネルギーが詰まっていたというのが私の先輩への印象である。

先輩の訃報を耳にしたのは少し遅かったので、1ヶ月程経って犀川のご自宅に伺いご焼香させて頂いた。突然の訪問にもかかわらず、奥様のご丁寧に対応して下された。先輩の遺影を見てもこの世におられないとはとても信じられなくて悲しいとかそういう思いが不思議と込み上げてこなかった。奥様にその心境をお話させてもらったが、奥様も「元気な主人で突然だったのでそのような気持ちも起こって来なくて今も主人が生きているようで、私自身、まだ信じられません。」とおっしゃっておられました。

お姿はなくとも、心の中ではちゃんと生きておられるのだなと感じました。和田先輩は今からも、我々の中で、それぞれ各自の想いととも生き続けて行かれる存在なのだと思います。

熊大応援団は初代和田先輩から4代までが創生期であり、その間に作り上げられたものである。2代、3代はその当時の体育会幹部や空手部、柔道部等か

ら招集された猛者達であり、和田先輩からすれば1年生となる4代は自身の母校豊津高校出身者でほとんどが占められていた。5代になってからは野村君のみが豊津出身で残りは他県出身者である。熊大応援団は4代までの和田さんの直接息のかかった時期に作られ、その後は剛毅木訥の精神を受け継ぎながらその時代環境に沿った形で少しずつ変遷しながら今日まで推移して来たように思われる。しかるに、和田先輩が突然エールを切られた時に産声を上げた熊大応援団にこれまで多くの諸先輩や同士達との出逢いがあったことはひとつの縁であり、和田先輩がおられたからこそ生まれた尊い縁だと思います。このようなご縁を頂いたことに対し、和田先輩はじめ諸先輩、同士の皆様方に感謝致します。

押忍

和田先輩との思い出

和田先輩については、死んだ兄貴から「熊大応援団の創設者であり、畏れ多い大先輩、雲の上の人」と聞かされており、応援団の皆さんと大学入学以来、もう既に45年もお付き合い戴いている中でも挨拶を交わすぐらいで、あの存在感あるオーラを感じながら、遠くから眺めているだけでしたが、2007年に始めてOBゴルフ会に参加し、その時、和田先輩から「毎年この日に、ゴルフだけでもやろう」と言われ、それ以来、毎年のゴルフを楽しみにしていました。

参加の人数は少ないものの、騒がしくも、下手でも楽しく出来ることが、毎年、ゴルフに向かわせる原動力になっていたと思います。

OB会ゴルフが恒例になり、3年目だったと記憶しておりますが、鶴屋近くの料理屋での前夜祭の折、和田先輩と隣合せになり、私の両親のこと、兄貴の遺した子供たちのこと、由美子さんのこと等、聞かれて答えていましたが、そのあと、先輩が何か言いかけて、突然、「クーン、……（無言）」。そのままヘッドロックを掛けられました。

あの時和田先輩は、私に何を言おうとしてらっしゃったのか、気になりながらもその後聞きそびれてしまい、悔いが残っております。先輩諸氏の中で、どなたか和田先輩の心の中が分かれる方がいらっしゃいましたら教えて戴きたい、と思っております。

5代 犬童 正仁

元気がいい。OB会出て来い!

今年、和田先輩からいただいた年賀状です。

今年も是非ともOB会にお集りし、無から創り

純粹で、真険な想いをあの柔和な語りの中に
みつけることを楽しみにしていました。

誠に残念です。

殊更暑かった今夏は非報に沈んでいました。

只々ご冥福をお祈りするばかりです。

六代 福岡 潤

「おい！ 元気かっ」「豊津に帰って来い」 第6代 林和徳

あんなにもお元気でおられていたのに、人の命ははかないとはいえあまりにも突然の死に、訃報の連絡を受けた時はただただ驚くばかりで現実のこととは思われませんでした。

人生をいつもカー一杯に生き、全力投球、全力疾走してこられた和田先輩とのあまりにあっけないお別れとなりましたことに悲しみは深まるばかりです。

かえりみれば、和田先輩との出会いは私が豊津高校(現育徳館高校)に在学していた時に、母校の教師として着任した時であったと思いますが、この時は特にこれという印象は残っておりません。和田先輩との本当の出会いは入団後1年経った豊津での合宿であったと思います。

次にお会いしたのは幹部の時に開催された第2回OB会で、その時、和田先輩と酒を飲み語り、肩を組んで武夫原を歌い踊ったことがかつての写真で偲ばれます。(下のスナップ写真はその時のものです)卒業後は年賀状とOB会での繋がりでした。年賀状では何時も一言添えられておりました。

その中でも「おい！ 元気かっ」の一言には励まされたものです。

OB会では一昨年妻と参加した時に「豊津に帰って来い」と言われました。ふるさとでいろんなことに参画し力を揮ってこられた和田先輩であるだけに私にも豊津に帰ってきて豊津や豊津高校に貢献するようなことを何かしたらどうかとの想いを込めた言葉であったのではないかと思います。

入学して豊津高校出身者は空手か応援団に入れと先輩に言われ、私は応援団を選択しました。

この選択が以後の人生の行方を決めたターニングポイントであったかも知れません。

社会人になってから今でも部屋には追い出しコンパで頂いた一枚の写真を飾っています。

常に心の中には豊津と応援団があり、心の礎でありこれまで頑張ってきたのだと思います。

そんな大切なものを築いてくださった和田先輩は時代が求めた人物であったと思います。

和田先輩の「あとはしっかりやってくれ」とおっしゃる声が、聞こえるような気がいたします。

お亡くなりなるその瞬間まで気にかけていたことと思います創部50周年の行事は必ず我々後輩で成功させてみせます。そして和田イズムのバトンは残った我々がしっかり受け取らねばならないと思います。

どうか、和田先輩、安らかに眠りになってください。そしていつまでも私たちを見守ってください。



1970年4月1日から7日春の合宿 豊津町民グラウンド



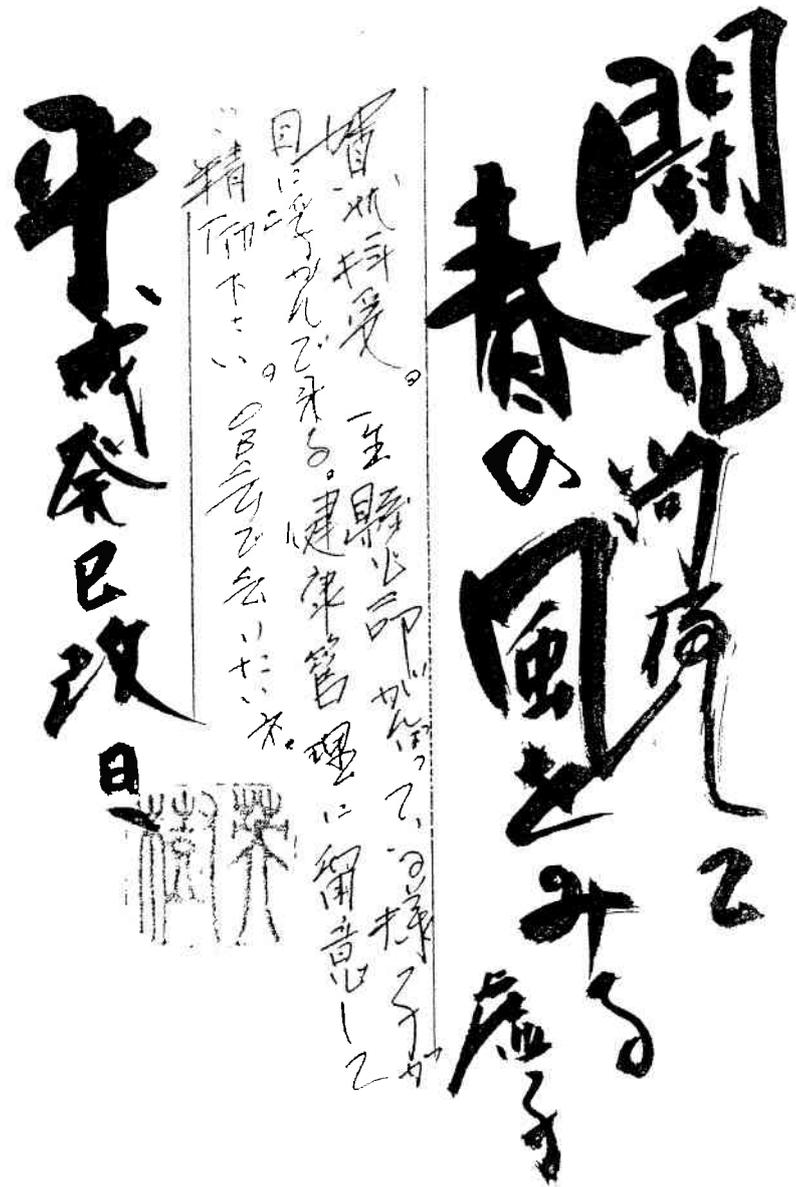
1971年9月25日第2回OB会懇親会

『皆様、大変ご無沙汰しています。平成15年に NTT DATA 九州支社を最後に退職し、アイネス、株式会社協同システムエンジニアリングと各社を転々として晴れて今年9月、40年と半年のサラリーマン生活を卒業することになりました。

九州単身赴任時、和田名誉会長、古賀先代をはじめ、OB 並びに現役の人たちと楽しい酒宴の機会を持つことができましたが、この度の和田名誉会長ご逝去の報には驚きを禁じえませんでした。気は若くても肉体の方は毎年経年劣化していくという事は絶えず意識していなければならないようです。和田名誉会長の有名な言葉「精神の肉体に及ぼす力より、肉体の精神に及ぼす力の方がより偉大である。」が思い浮かんできました。この精神が引き継がれていく限りは、熊本大学応援団は永遠に不滅であると信じます。OB 並びに現役皆様のご健康と益々のご活躍を心より祈念しております。』

6代 有吉 勇児

- 1 2013年、年賀状
2014年、?



- 2 入部1年目の、春の合宿。豊津高校へ（先輩の赴任高校）。
起床 - 練習 - 朝食 - (休) - 練習 - (休) - 練習
- 昼食 - (休) - 練習 - 夕食 - (休) - 練習 - 就寝
規則正しい一日。合宿後、体重が60kg台に乗った。
教訓・・・誰が、豊津高校で合宿すると言ったの、膝の屈伸もできなかった。
規則正しい毎日は、体重を増加させる。

- 3 いったん、大学の二次試験、熊大の生協で出会いました。「センター試験で点数が足りなかった生徒が、頑張っで見事合格した。」、生徒の頑張りは当然ですが、教師としての密かな喜びかなと思った。本当に楽しい、嬉しい笑顔で、忘れられない一瞬でした。私も、いつもこの一瞬を目指しています。

何時も笑っていて、豪放磊落という言葉は和田先輩のためにある言葉と思いました。年賀状に元気の良い字で「一生懸命」といつも書いてくれていました。それが、私は大好きでした。

私達に応援団とは何か、人生とは、男とは、そして生きることとは何かを教えてくださいました。ありがとうございました。私達は熊大応援団 OB 会の象徴を亡くしてしまいました。

和田先輩は OB250 名の頂点で、和田先輩の考え方生き方が我々の指針でした。今後も先輩の考え方、生き方は永遠に私達の心の中に生き続けることでしょう。そしてそれを後輩に伝えていくことが私達の責務だと思います。

和田先輩にお礼を申し上げます。それは応援団を創部していただいたことです。現在の私が存在できているのは正しく、私が熊本大学応援団に入部し、応援団お経験したからです。応援団先輩、同僚、後輩と知り合いになることができました。これは私が現在63歳ですが、今までの私の大切な財産、他の人が羨ましがる様な財産を持つことができました。私が今こうして生きていくことができるのも応援団のお蔭です。応援団ありがとう。そして和田先輩ありがとうございました。

7代 河村 久幸

感謝

7代 三小田 啓治

「しあわせは
いつも
じぶんの
ところが
きめる
みつを」

和田先輩が退職記念のお祝いの会に参加した時、いただいた掛け軸の詩です。
この詩を毎日目にしていました。特に、体調を崩し、体が不自由になり、リハビリに
励んでいる時、この言葉に励まされました。

「これができない、あれができない」と思うより「これとこれはできるようになった」
と考えるという前向きになった自分がいました。

また、毎回の OB 会での先輩の含蓄のある話を楽しみにし、新たなやる気が出てきま
した。

私は応援団に入って和田英樹という人物を先輩に持つことができたことはしあわせで
した。もっともっとお話を聞きたかったです。本当に本当にありがとうございました。
最後に今の私の気持ちに合った会田みつをの詩です。

「ただいだけで

あなたがそこに
ただいだけで
その場の空気が
あかるくなる

あなたがそこに
ただいだけで
みんなのところが
やすらぐ

そんな
あなたにわたしも
なりたい
みつを」

熊大応援団創設に心から感謝しています

7代 原田 順一

私は一浪して、熊大法文学部に入学しました。その時の目標は、教師の免許を取ることでした。しかし、当時の私は生徒たちを前に話しができる自信はありませんでした。私の心のどこかに、自分を変えたい、自分に自信を持ちたいという気持ちがありました。高校まで体育系の部活動の経験のない私には、どのサークルも入部する勇気が出てきませんでした。(なぜか文系のサークルは頭にはありませんでした)

そこへ突然、応援団という私には、全く得体の知れないものが現れ、執拗に入団を迫りました。(学館前の入団受付の所には「おふくろも泣いてよろこぶ応援団」と書かれた看板があったことを覚えています。)私は2時間以上、入団を断り続けました。その時、当時の団長をされていた佐村先輩が来られ、「お前は出身高校はどこか」と聞かれ、「田川高校です」と答えると「田川か、知っちゃおう、知っちゃおう」と言われ、私は佐村先輩の「知っちゃおう」に親近感を覚え、次の「自分を試してみんか」と言われた言葉に私は大きく引かれ、入団してみることにしました。

しかし、1年生の時は毎日、今日の練習が終わったら退団すると自分に言っていたが、練習が終わると、なぜか、うれしくて、退団を口にすることが出来ないまま、1年間が過ぎました。2年生になった時、自分でもびっくりしたのが、この私が新入生を応援団に勧誘していたことです。

私の大学生活は、応援団生活一色でした。しかし、その応援団での体験は私の教員生活、大学卒業後の私の人生を支えてくれる大きな柱の一本となりました。

一昨年(2007年)の3月末、私は高校教員を定年退職致しました。もし和田先輩が、この応援団を作っておられなかったら、私の人生は全く別の人生になったように思えます。和田先輩に心から感謝申し上げます。

そして、心から和田先輩の御冥福をお祈り申し上げます。

和田先輩を偲んで

第7代目の竹下です。同じ代の河村や原田から、和田先輩が急病で亡くなられたと連絡がありました。大変に驚きましたし、非常に悲しく、御家族の心情は本当につらくお寂しいことと存じます。しかし、一面、和田先輩らしい豪快な亡くなり様だと、うらやましい感じを持ちました。生き方も死に方も、真似しようにも真似することさえできない和田先輩でした。

私が応援団に入って、一番感じたのは、和田先輩が打ち立てた目には見えない理念でした。私は、それを「この世の中で、あるいは人生で、最も大切なこと、大事なことは何か？を求め続けること」と思っています。規律ある自由、先輩も後輩も人は皆平等、他人を思いやること、優しさ、強さ、粘り、根性、などなど、大切なことや大事なことは、人それぞれ違うかもしれませんが、それらを悩み苦しみながらも求め続けること。それを応援団を通じて教えて下さったのは和田先輩でした。

私は、昭和41年4月から昭和42年11月まで、熊本大学黒髪キャンパスの隣にある済々黌高校に通っていました。柔道部に属していましたので、時に、当時の知命堂の近くにあった木造の武道場に練習に行くことがありました。その時に、武夫原の横を歩いていくと、汚いユニフォームを着た熊大生の一団が横1列になって、後から思えば四股立ちや御手手ふりふりをしながら大声を出していました。どうも、4代目の沖先輩、小倉先輩、桃坂先輩などがおられたような気がします。和田先輩達が立ち上げた草創期の応援団の練習風景だったようです。数年後に自分がその仲間に入るとは夢にも思いませんでしたが、何かの御縁があったのでしょうか。

私は最近、仕事に拘束されて、OB会に長く出ておりませんし、今回の大事な追悼の会にも出られません。残念で心苦しく、申し訳なく思っています。お許してください。こんな末席を汚しているだけの私にとっても、若い日に、和田先輩が立ち上げた熊本大学応援団という素晴らし集団に入れたことは、何ものにも代えがたい有難いことです。その思いを心の灯として、凡人は凡人なりに、夕やみ迫る人生を生きていきたいと思えます。突然旅立たれた和田先輩に心から感謝申し上げます。そして、応援団OB、OG、現役の皆様、関係する方々の御健勝をお祈りいたします。

和田先輩の笑顔に感謝

第8代目団長 長谷 政晴

和田先輩がこんなに早くに逝ってしまわれたことが今も信じられない気持ちです。先輩もたくさんの心残りがあったろうと思います。私たちもまだまだ先輩の笑顔を見なかった。まだまだいろんな話を聞きたかった。残念の一言です。

私たち8代目が入団したとき、当然のことながら和田先輩はすでに卒業されておりました。(唯一、高橋は和田先生に高校で教わっていたので、身近に知っていたのですが。)しかし和田先輩はいろんな場で語られる応援団創設時のエピソードの中に生き生きと登場していました。商大定期戦でのたった一人の熊大応援団のエール、空手部主将をやりながら団を作ったこと、商大に練習で本当にしごかれたこと、朝発声練習をしているとドイツ語の先生が苦情を言いに来たのに先輩はほめられたと勘違いしたこと、などの話が思い出されます。これらの話は誰から聞いたのか、自分たちのすぐ上の先輩から聞いたのもあろうし、初代や2代目3代目の方々から直接聞いたのもあろうと思いますが、実に生き生きと和田先輩や草創期の先輩方の情熱と苦労、あるいはユーモアが伝わる話ばかりでした。応援団創設に無から挑戦して、次第に信頼しあえる仲間が増え形ができ、紆余曲折を経ながら、やがてその志や活動が大学や九州学生応援団連盟などに認められていくという物語はあとに続く私たち後輩に常に誇りと自覚を促す物語でもありました。はじめは小さくとも清冽に湧きでた泉は、和田先輩の人的魅力と諸先輩方の結びつきによって、ゆっくりと川幅を広げ、やがて多くの後輩たちを引きつけて今日まで滔々と流れてきたと感じます。40年あまり前に入団しやがて団を預かり、真の応援とは何か悩み苦しみながらも、それぞれに胸に刻んだ応援団、武夫原でひたすらに打ち込んだ練習と演武、楽しかった思い出、つらかった出来事、それらすべての根っこに和田先輩の応援団への思いがあります。

私は元来人見知りで引っ込み思案の性格でした(今も同じです)が応援団でさまざまな活動をするなかで実に多くのことを学びました。応援団で学んだことが、その後の人生の支えになってきたことを感謝しています。定年を迎えて我が身を振り返ると、学生時代の一途さはとうの昔になくなり、「馬鹿」になってやるということもなくなりました。心のどこかに「これじゃいかんぞ」「もっと馬鹿になってやれよ」という自分がいますが、それ以上に楽をしたい腰が重い自分がいます。こうして和田先輩と応援団のことを振り返りながら、さてこれからどう生きるかということをおぼろげに考えなければいけないと思っています。

和田先輩は、私の勤務する北稜高校にも西日本工業大学の学生募集で何度か来ていただきました。初めて見えた時、残念ながら私は出張で会えませんでした。後で、は

がきを頂きました。「会えなかったのは残念だったが、長谷の学校は手入れの行き届いたきれいな学校だった。生徒も元気よく挨拶をしてくれた。おまえがここで頑張っている雰囲気を感じながら帰ってきた」とありました。いつもあたたかく後輩を見守ってくれている和田先輩のまなざしを感じて本当にうれしいはがきでした。

これからは空の上から、熊大応援団とOB会を見守ってください。

心からご冥福をお祈りいたします。押忍。

和田先輩・和田先生そして人生の師

八代

高橋敬一

和田英樹先生は、私の人生の師でした。熊本大学法文学部文科（国語国文学専攻）の先輩であり、福岡県立豊津高校（現育徳館高校）時代の恩師です。そして、同じ教育者の道を歩むきっかけを作ってくれたのも、先生でした。

先生の訃報をお聞きして、最初に思い浮かんだのは、何故か高校時代の先生のお姿でした。

初めて、先生にお目にかかったのは、高校の応援団デビューの日でした。入学してまもなくの頃、校庭の片隅で、昼休みに行われていた応援部の練習の時です。当時、豊津高校には、クラスの委員の一つに応援部委員というのがありました。私はジャンケンで負けて、不本意にも一番やりたくなかった委員になってしまったのです。いつでも辞められると思つて参加した活動でしたが、一年間続きました。練習の時はいつも先生が立ち会つて下さつていたように思いますが、その最初の日のお姿が思い浮かびました。炎天下の小倉球場での野球の応援は、良き思い出として今でも鮮明に心に残っています。

三年間の国語の授業のなかで、一番記憶に残っているのは、三年生の時の森陽外『舞姫』を教材に扱った授業です。「石炭をばはや積み果てつ。……」で始まる冒頭文を暗唱したことや、当時の教室の様子などが昨日のことに鮮明に思い出されるのはなんとも不思議です。恋愛小説ということもあつたでしょうが、クラスみんなが何故か燃えて？いました。文学青年であつた先生の雰囲気こそうさせたに違いないと今でも思っています。山本周五郎がお好きだということをお聞きしたときは、そうだ、先生は、日本人が大切にしてきた「絆」（義理・人情）を大事にされた方だつたなあと思ひました。

ご葬儀（お通夜）の日、先生の遺影を拝見しておりましたら、先生が「おい、高橋……」と、声をかけて下さいました。私の耳にははつきりと聞こえたのですが、もつと頑張れという先生の最後の励ましの言葉であつたと思つてます。

先生のご冥福を心よりお祈り致します。

九代目 戸上 勝喜

7月28日午後6時過ぎに、九代目の峯君から電話があった。順延した飲み会の日程調整と思い、話を聞くうちに耳を疑ってしまった。「和田先輩か亡くなった。」とのこと。「いやいや、先日、和田先輩からハガキを頂いたばかり。」と会話をしたが、間違いのない事実であった。仕事の関係から30日の午前中にお参りした次第である。

小倉に転勤して7月で4年目を迎えたが、住まいは古い木造の平屋社宅であった。ところが諸般の事情により社宅を売却することになり、マンション住まいになってしまった。今までは妻と犬が同居できたが、マンションでは犬が飼えないので妻と犬は福岡の自宅に帰り、晴れて单身生活の身になった。このような経緯から住所が変更になり、これまで年賀状を頂いた方々に新しい住所のお知らせを兼ねて暑中見舞状を送らせていただいた。

7月12日に和田先輩から返事を有難く頂戴した。いつもながらの達筆で、豪快な、勇気付けられるおハガキであった。それ故に、半月後の訃報が全く信じられなかった。ハガキを見るたびに和田先輩の元気な姿を思い出しています。そのハガキを皆さんに紹介したく筆をとりました。

合掌

暑中見舞状
 ありがたくいただきました。
 九代目の生活も日々目を迫ることに
 になりました。お力と週にこれほど
 なること。御挨拶の様々嬉しく思
 っています。暑中見舞の書き方はあ
 ります。どうぞ、お力を下さ
 七月十二日

32

和田初代団長のご逝去を悼んで

10代 浅見 雄治

私は和田初代が団を創設されて10年後に、熊本大学応援団に入団しました。年に1、2回お目にかかるぐらいでしたが、その存在感は圧倒的であり、まさに「伝説」の人でした。

1回生の時、和田初代の結婚式に大分まででかけて式場で、「武夫原頭に草萌えて」を披露したことを思い出します。

もう一度あの独特な「巻頭言」を見たかったですが、それも出来なくなってしまいました。先輩のご冥福をお祈りいたします。

近況報告

第 11 代 岡本久男

和田名誉会長のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

私が熊大応援団に入団したのは、早いもので39年前になります。入団した頃は、同級生は8人位いたと思いますが、退団する時は、3人になっていました。その応援団を創られたのが、初代団長の和田先輩であり、豊津高校出身の先輩方が多くおられました。その年の11月に第2回のOB会が開催され、和田先輩と初めてお会いすることが出来ました。何も無いところから応援団を創部された先輩は、とても迫力があり、威厳を感じました。最後にOB会でお会いしたのは、もう13年前になります。その時のお元気な姿が、今でも思い出され、お亡くなりになられたことは本当に残念でなりません。

さて、私は卒業後、東京の会社に入社し、勤続33年を過ぎ、定年まであと4年です。家族は、家内と次男の3人です。長男は、結婚し、孫娘が一人います。

応援団の思い出として、阿蘇遠歩がありますが、大学1年から、修士2年まで6回参加しました。その経験があるので、54歳のとき、健康診断でメタボと言われ、マラソンにでも出てみようかなと思い、東京マラソンに申し込みました。結果は、抽選で外れ、同じ東京の荒川市民マラソンに出ることにしました。通勤が片道2時間掛かるので、練習は土日のみです。インターネットで10Km走れば、フルマラソンは完走できるという記事を信じて、1回に10kmは、走るようにしました。

結果は、25Kmまでは順調に走れましたが、突然ふくらはぎが付き、1歩も動けなくなり、30分程うずくまるしかなく、残りは殆ど歩きました。幸い、制限時間が7時間だったので、丁度6時間で完歩しましたが、自分の甘さを痛感しました。

それからは、できるだけ10km以上走るように心がけ、11月のつくばマラソンでは4時間40分で完走することが出来ました。また、念願の東京マラソンにも2度出場することが出来、どちらも5時間を切りました。東京マラソンは、銀座、浅草寺、東京スカイツリー等を見ながら走れ、沿道の観衆も多く、何とも言えない感動です。このように走ることが出来るのも、応援団で鍛えたお陰だと思えます。

話は変わりますが、現在工学部の同窓会の東京支部の会長を拝命しております。更に全学部対象の東京連合同窓会の役員でもあり、それにも参加しております。今年5月に開催され、上城さん、前川さんにお会いしました。この同窓会には、現役の団長が巻頭言をきり、武夫原頭に草萌えてを全員で熱唱し、懐かしい雰囲気になります。

応援団もチアリーダー部が出来、我々の時とは違う華やかな雰囲気が感じられますが、今後益々発展することも祈念し、追悼の報告と致します。

押忍

私と和田さんとの関係は、応援団つながりの前に京都高校の教師と生徒の関係でした。ただし、直接習ってはいませんしお話ししたことはありませんでした。同期の副団長村上君は、京都高校時代に和田先生の下、応援部員だったので熊大入学＝熊大応援団入部であったかもしれません。

私は、4月に生協と図書館の間を歩いていて勧誘されました。これも縁かと思い入部しました。私が和田さんを意識しはじめたのは、1年の夏にOB会を開催してからでした。和田さんとは20歳くらいの年齢差ですが、和田さん筆頭に30～40歳の元気いっぱいの大勢のOBの皆様が集まってこられました。私は、インカレ強化練習時点で退部したいと意志表示していましたが、OBの皆様にお会いして、お話しして心が変わり辞めずにすみしました。OB会では和田さんは応援団を作ったときの経緯とあわせて、「応援団は必要なくなったらいつでもつぶしてよい」ということをお話されていたことを思い出します。私が、3年幹部のときには20周年記念OB会も開きました。そこでもお話を聞きました。静かに黙って話を聴いてうなずく、「ガハハ」と笑われる、和田さんの顔が浮かびます。

就職してあるとき、突然和田さんから電話があり、娘さんが決めた就職先を心配してどんな会社か知りたいということでした。(私の会社と関連会社であったため)これはご家族の方もしらないことだと思います。

今また熊大応援団が復活しました。団長はこの復活時の気持ちを後輩に伝えていってほしいと思います。和田さん2号、3号が出現して熊大応援団は途切れながらも永久不滅ではないでしょうか。

最後に、和田さんのお顔は一生忘れません。願わくは、私どもの行く手を見守りください。心より御冥福をお祈り申し上げ、これをもちまして惜別の言葉と致します。

押忍

和田先輩の思い出

24代 村上俊樹

私は、昭和 62 年（1987 年）に熊本大学に入学し、体育会応援団に入団する機会を得ました。私が 1 回生の時OB会があり、その時、会長をされていた和田先輩にお会いしたのが、最初だったと思います。私は大学を出て、今年で 19 年目になりますが、和田先輩の思い出について振り返り、印象に残ったことをいくつか記してみたいと思います。

和田先輩のことは、先輩方から熊大応援団の創設者で初代団長をされた伝説の方と伝え聞いておりました。応援団を創設されたきっかけは、「商定戦の開会式(?)で、商大応援団から熊大に切られたエールに対し、当時空手部主将だった和田先輩が即興でエールを返したところ、商大は厳粛にエールを受けていたのに、熊大生から笑い声が上がった。これではいけないと思い、応援団を創設した。部員、部室、練習場など何もないゼロからのスタートで、かなり大変だった。」と記憶しております。

和田先輩のご自宅には、毎年、正月には多くの方々が年始のあいさつに来られます。私も何回か伺いましたが、1 回生の頃、3 回生の幹部と初めて年始のあいさつに伺った時のことが一番印象に残っています。その時も大勢の方々があいさつに来られ、大賑わいの中で夜遅くまで飲み明かしました。その翌早朝、まだひんやりする中で、和田先輩に隣のイチゴ畑に連れて行ってもらい、「いくらでも食べていいぞ」と言われ、遠慮なくいただきました。飲み明けの渴いた喉に最高のイチゴで、冷たく、甘く、水分が多く、その美味しさは今でも鮮明に記憶に残っております。

私が 4 回生の時、1 年間大学を休学してオーストラリアをオートバイで 1 周したのですが、そのことを、和田先輩はたいへん感心されて、何かと声をかけていただきました。たいへんうれしかったです。

私が平成 6 年に大学院を卒業する時に、和田先輩のご長男の仁樹君が熊大に入学するというので、和田先輩から下宿先の相談を受けました。結果、私がそれまで住んでいた下宿に仁樹君が住むことになったわけですが、その時、私が小学校から使っていた机を仁樹君が引き継いでくれることになりました。実はこの机、和田先輩が将来自宅車庫の 2 階に図書館をつくることを計画されていたらしく、その時に机の一つとして使用しようと、2 階に置かれていると、仁樹君から聞きました。たいへんありがたく思っております。

平成 7 年 4 月の私の結婚式では、私の達での願いで、和田先輩に仲人をお願いしたところ、快諾していただきました。出席者 70 名が全て親族という結婚式でしたが、その仲人のあいさつで、熊大応援団の押忍の精神についてお話していただき、大切な言葉の贈り物をいただきました。

卒業してから、何回かOB会でゴルフに誘われましたが、なかなか行けず、今年こそはと思っておりましたが、とうとう一緒に回る事が叶わなくなってしまい、とても後悔しております。

平成25年7月29日は、偶然にも中学3年の息子のバレーボールの県大会が行橋市民体育館であるということで、休暇をとっていたため、家内とともに通夜に出席することができました。宮崎（単身赴任先）で仕事をしていれば、通夜、葬儀に出席することは難しかったかなと思うと、これも何かのご縁を感じているところです。

和田先輩には、これまで何かと気にかけていただき、本当に感謝しています。毎年いただく年賀状には、「元気か！」と一言、力強い言葉をいただきました。本当にありがとうございました。和田先輩、どうぞ安らかに眠りください。和田先輩から始まった応援団の押忍の精神は、代を通じて、今も生き続けていると確信しております。

最後に、奥様をはじめ仁樹くん、ご長女さまご家族の皆様のお悲しみはいかばかりかとお察しいたします。謹んでお悔やみ申しあげますとともに、心から和田先輩のご冥福をお祈りいたします。

押忍

あまりにも突然のことで耳を疑った。「和田先輩が亡くなりましたので、同期の方に連絡してください。」との電話があったのは、8月初めの地元まつりを一週間後に控えた日曜夕刻だった。

平成元年の入団当初は、応援団を創設した畏れ多い方と感じていたが、親子ほどの年の差もありずいぶんかわいがってもらった。現役時代には、新歓コンパや演武会のたびに激励頂いた。卒業後はOB会でお会いするたびに、「よく来た。元気か。仕事はどうだ。」といろいろと声をかけて頂いた。毎回参加しているわけでもないのに気にかけて下さった。

最後にお会いしたのは2年前になってしまう。3代古賀先輩の呼びかけで小倉の街だった。その時も相変わらず豪快で、「元気か。」と。北九州・京築と近かったので、「もう一度小倉で。」と春に古賀先輩と話していたのに、それもかなわぬ事になってしまった。

和田さんへ

27代 秋田 聖

私は、平成2年に熊本大学に入学して体育会入会式の直後の体育館の出口で、当時の24代村上俊樹団長の元へ「応援団に入りたいんですけど。」と申し出て入団した。

以来23年の応援団員。

和田さんとの出会いは平成3年のOB会、2回生の時。自己紹介をした程度だったと思う。OBは皆、先輩とか先生とか呼んでいるが、今まで総会等の公式の場で会長と付ける以外、和田さんとしかお呼びした事がない。先輩というには余りにも遠い雲の上の存在であったからだ。20年来お付き合いさせて頂いているが、会合での挨拶を拝聴する度に、感銘を受け、その言葉に教えられてきた。

2005年OB会で現役復活を誰よりも喜び、翌年は40周年ということで、急遽2年連続でOB会を開催する事となった。2008年、2010年とOB会は2年毎に続きこの年「来年から毎年OB会をやろう」ということになった。6代中川さん、2代原さんと毎回のように訃報を聞くようになり、和田さんの挨拶では度々生きる事を説く機会が増えてきた。「死んだら終わり。」「来れる内に来い。」和田さんならではの呼びかけである。

2013年7月28日河村会長からの訃報の連絡に、耳を疑った。事務局長として各代に連絡をした時のOBの反応も同じだ。口を揃えて「え、あの和田さんが、、、、、。そんなはずない。」

通夜葬儀においても現実を受け入れるのは容易ではなかった。応援団関係者の受付として気丈に振る舞うのがせめてもの自分隠しであった。

2013年11月2日。熊大応援団は和田名誉会長の追悼式を行い、現実を受け入れる。

和田さん、あなたは私たち熊大応援団OBの心の中に生き続けます。

どうか安らかにお休みください。

わがまを言わせてもらうならば、これからも我々を見守りください。

押忍

裏 卷 頭 言(編集後記)

期せずして和田名誉会長追悼剛毅を発刊する事となりました。
寄稿頂いた OB の皆様、真に有難うございます。なるべく原稿を使わせて頂きつつ、素人なりに編集させて頂きましたが、誤字脱字等不備御座いましたら、何卒ご勘弁頂きたく、ご了承願います。
誰もが未だに信じられない現実、そして現実のものとして受け入れざるを得ない心境と存じます。
応援団に入団して 23 年、様々な伝説をお聞きしましたが、今回多くの原稿を拝読させて頂き、まだまだ知らないご縁や、運命に導かれている事を知りました。入学した後、生協付近で声を掛けられたあの時、なぜだか断りきれずに入団したから今がある。何度も辞めようと思ったが辞めなかったから今がある。なんと不思議な皆の共通点ではないでしょうか。
初代和田英樹団長に共感し、魅かれ、絆を深めあった事。
熊大応援団 OB である事の誇り。
社会に出て各々の生活を送りながらも、心の中には現役だった頃の強烈なそれぞれの 4 年間。その後数十年に渡る不思議な縁。その絶対的中心に居たのは和田英樹名誉会長でした。
本誌を拝読してまた一つ応援団 OB の絆が深まった事と存じます。
生前多くの教えを受け、死して尚我々に教えを頂きました。
ここに謹んで和田名誉会長の御冥福をお祈り致すと共に、若輩ながら OB 会事務局長として、熊本大学応援団 OB を代表致しまして、和田名誉会長に最大限の敬意を表し、感謝を申し上げ、裏巻頭言と致します。 合掌。

押忍

熊本大学応援団 OB 会事務局長

秋田 聖



平成25年6月 東京錦陵会(豊津高校同窓会)にてエールを切る和田英樹名誉会長
写真提供 4代木村 英美氏